

平成22年度 阪神北地域夢会議・さわやかフォーラムの概要

日 時：平成23年1月22日（土）13:00～16:00

場 所：宝塚市立東公民館

参加人数：102名

主 催：阪神北地域ビジョン委員会、阪神北県民局

1. 開催趣旨

さらなる少子高齢化や人口減少が予測される中、望ましい阪神北地域の将来像と取り組み方策を参加者全員で検討し、今後の地域でのビジョン活動や、「阪神市民文化社会ビジョン」の見直し点検に反映させる。

2. テーマ「活かそう資源、ともに育てよう地域」

3. プログラム

【第1部】プレゼンテーション

- ・「阪神市民文化社会ビジョン」

兵庫県阪神北県民局 北摂魅力参事

【第2部】テーマ別意見交換

- ・「様々なまちから移り住んできた住宅地での地域づくり」
 - ・「まちの伝統文化を守り続ける住民の地域づくり」
 - ・「人が集まる商業地域の住空間での地域づくり」
 - ・「自然との共生、土地の伝承を受け継ぐ住民の地域づくり」
- のいずれかのテーブルで意見交換を行う。

【第3部】意見発表

- ・ テーマごとの意見をもとに、全員参加の意見交換

4. 意見発表（発言要旨）

様々なまちから移り住んできた住宅地での地域づくり Aテーブル

地域で一番大事なことは、自治会などの各種団体が活発に活動し、そこに多くの人が参画して、持続、継続させることである。学童の見守りも継続すると顔を覚えるようになる。小学校から大学に行くまで実施している地域もあるようで、それは地域にプラスとなっている。最近、ニュータウンの住民が多くなっているが、地域づくりという視点では、どの程度貢献できているか疑問である。ニュータウンと旧集落、あるいは、新住民と旧住民がどのように調和していくかが課題である。また、子ども世帯と親との同居問題など、現代は家族という単位が崩れてきている。次代を担う若者たちと協働した社会づくりをしていかなければ将来はない。

地域住民の交流は、肩をはずずに気軽に実践することが大事である。一人暮らしの高齢者



へのケアは民生委員でできるかが問題になっていることから、地域で一緒になって取り組むことが大事である。高齢者は、歳をとるにつれて話さなくなるが、心も体も閉じこもってはいけない。子どもたちとも積極的につきあうことが大事である。また、家族単位を大事にしてコミュニケーションをとることが基本である。

様々なまちから移り住んできた住宅地での地域づくり Bテーブル

将来像としては、子どもから高齢者まで一緒に楽しく暮らせるまちの実現と、住みたいと思う景観のあるまちづくりである。その中で議論の中心となったのは、一戸建て住宅とマンションである。地域にはマンションもたくさんあり、閉鎖性をどうするか、あるいは、古くからあるまちにやってきて、昔からの住民と新しい住民との価値観の違いで、なかなか歩み寄れないといったことをどう解決するかが課題となっている。地域にはさまざまな人がいるが、裸になって話し合い、自分の住む身近なところから始める。そのためには、当たり前だが、まず、あいさつをする。それもできないで次のことはできない。これがいざという時に大きなことにつながると考える。あいさつから始めて、近所の清掃を一緒にする。それが呼びかけあいにつながり、その先の安否確認につながる。世間ではよく安否確認が取りざたされるが、安否確認ありきではない。隣どうして声を掛けあう、そうすれば安否確認がスムーズに行く。自分の居場所、ゆっくりできるところ、あるいは、趣味の仲間が寄り合い、話し合える居場所をつくることも大事である。

また、住みたいと思う景観づくりは、自分たちの住むまちの価値を高めていく。それには不動産価値もある。ヨーロッパではこういう考えで取り組んでいるまちがある。四季を楽しむなど、毎日の散歩が楽しくなる住み続けたいまちづくりを行政とともに実現していきたい。

様々なまちから移り住んできた住宅地での地域づくり Cテーブル

いろいろな人が集まるまちは人間関係が希薄になっているので、さまざまな問題が発生して住みにくいまちとなり、助け合いができないまちになっているのではないかと、といった視点から話し合った。将来どんなまちになればいいか、それは市民自治のできるまち、市民みずからが支え合えるまちである。そのためには、住民が知り合い、ふれあうことが大切である。まずは、あいさつをして、仲間づくりをする。それには公園のような場所が必要である。公園のベンチやあずまやを利用することによって高齢者が集える、といった工夫が必要である。また、朝市や足湯といったイベントなども一つの方法である。趣味の会をつくって、サークル活動をする、屋内であれば集会所なども必要である。あいさつをして知り合い、ふれあうことによって、いろいろなグループがうまれてくる。志を共有したそれぞれの目的意識にあったグループができてくる。わきあいあいでも過ごせるので気分もよく、気持ちよく集える仲間ができる。いろいろなグループができれば、協力しあい連携しあうことによって、強い絆で結ばれた仲間意識が生まれ、安心して住み続けたいまちができあがる。連携することで私たちの市民自治が完成する。そうすれば一人一人がいつまでも気持ちよく、住み続けたい、お互いの顔が見える市民自治ができるまちの完成につながる。

まちの伝統文化を守り続ける住民の地域づくり Aテーブル

まちづくりの基本は人と人とのつながりである。まちづくりにはそれを世話していく人が必要である。昔からある伝統文化や生活習慣、お正月、節句など生活に根付いている習慣、それらを洗い出して、こういう伝統行事があるよ、こういうことを昔はしていたよ、といったことを発信していくのが大事である。これを発掘していくためには、人と人とのつながりが必要で、伝統文化や習慣を復活させていかなければならない。しかし、新しく来られた方は、残っている習慣に対して不都合を感じているので、現代風にいいところをとって復活させていく必要がある。このため、伝統の復活をめざして、新しい形をみんなで考えていくには、向こう3軒両隣を復活させることである。現代は、核家族化で、家族のつながり、3世代同居が少なくなっていることから、それを補う意味でも向こう3軒両隣の復活が大事である。また、子どもを活動の中心として、小学校区を活動範囲に、こうした行事を復活させていければ、伝統文化を守った住み良いまちづくり、ひいては日本のまちづくりができるのではないかと考える。



まちの伝統文化を守り続ける住民の地域づくり Bテーブル

地域の人がつながりを持つことが大事である。地域に人々のつながりを持つためにはどういう場があるだろうか、昔だったら神社やお寺があった。神社では夏まつりや秋祭り、盆踊りがあり、そうしたことをきっかけに人々がつながっていければいいのではないかと。しかし、現在は神社にペットをつれて入ってはいけない、子どもが入って遊んだら危ないといって制限されてしまい、神社とのつながりがなくなりつつある。ある地域では、どんど祭りの際、準備委員会を開いて、太鼓の打ち方や内容など話し合ったが、「どんど」って何といったことを言われる方もいて、なかなか伝承できていないということもあったそうである。地域には、昔からの文化遺産や技能、昔話がある。それを最近移り住んできた方や子どもたちに伝えていきたい。それには高齢者の力が必要である。また、場づくりのためには、隣組や青年団、NPO、子育てサロン、自治会といったものを使い、女性の力や若い人の力など総合力を活かして、つながりを深めていく努力が必要である。

人が集まる商業地域の住空間での地域づくり Aテーブル

商業地の活性化では、人に来てもらうことはもちろん大切だが、自分たちが地元で毎日楽しめる場所、伊丹や西宮で行っている「まちなかバル」みたいなイベントが必要である。最近、地元でデートしているか、子育てが楽しいか、若返りが地元でできているか。商店街は、自分の家の冷蔵庫といったくらいの身近なものにしていかないといけない。あわせて、こんにちわ、おはようというあいさつができる商業地にしていきたい。

また、3点ポイントなる意見が出た。1つに「ツボ」、2つに「利便性」、最後に「活性化」である。ツボとは、パワースポットのことで、何か刺激になるところ、今までは地域を面としてとらえていたり、線や導線を引いていたりするが、最終的には点になっていくのではな

いか。空き店舗の活用や商店街の活性化も個々に対応していくべきではないか。活性化は、まちの魅力をきっちり打ち出せるところ、例えば、おばあちゃんのデートスポット、おじいちゃんとおばあちゃんが楽しめるといった場所である。利便性は、地元で買い物ができ、用が済むということ。これからは情報の流し方を考えて、情報の偏りがないようにしていきたい。結論として、阪神北地域にはまだまだチャンスがある。だれがやるのかではなく、自分たちがやるというプラス思考でネットワークをつくり、人とのつながりを広げていこうということである。

人が集まる商業地域の住空間での地域づくり Bテーブル

駅前商店街を活かす方法としては、空き店舗や広場を利用して人が集まるところを使ってはどうか。それには、商業者、地域住民、外部からの訪問者の3者による地域力の向上が必要である。また、駅周辺の地図を提供してはどうか。猪名川町では、地元産の野菜や特産品が人気で、休日だと車がとめられないそうである。こうした地域資源を発掘することも大事である。このほか、レンタル自転車を置くなど、やさしい駅の整備をしてはどうかといった意見があった。大事なことは、商店街をもう一度考えることで、まずはあいさつから始まると考える。できれば、商店関係者とも話し合えればよい議論になったと思う。

自然との共生、郷土の伝承を受け継ぐ住民の地域づくり Aテーブル

ハード面とソフト面がある。ソフト面では、郷土や里山といったいろいろなものがあるが、それをどう発信していくか、そしてどう受け止めてもらえるかである。その発信は、むやみにやったのではいけない。里山に入って勝手に作物をとって帰るなど、マナーの悪い人が入って来られても困る。こうした場で知り合った方とネットワークを広げていくのがいい。ハード面としては、例えば、三田市では、今、「てんぐの森」という公園を整備しているが、これからどのように地元が活用していくかである。また、これからは自動車よりも自転車の利用を促進し、自転車専用道を整備して、日本海と瀬戸内海側を行き来できることを考え、どこに行けばどういったものがあるか、地元の人しか知らないスポットを整備すればいいと考える。

自然との共生、郷土の伝承を受け継ぐ住民の地域づくり Bテーブル

自然との共生については、それぞれの地域で違う考えがあることを理解すべきである。農村の魅力をアピールする、伝統工芸の芸術村をつくる、まちと田舎の人が協力して食育をテーマにして活動するといった意見があげられたが、直接自然と関わることよりも、間接的にも自然につながることを実践したほうが、多くの方に積極的に参加してもらえるのではないかと考える。里山づくりでも、直接現地に行かなくても、自然との関わりはできる。まちの人から見た農村や山村には魅力があっていると思うだろうが、そこに暮らす高齢者は、竹やぶはあるが、竹の子はそんなに食べないし、むしろ隣の家に覆い被さってどうして切ろうかと毎日考えている。まちと農村のつながりは、竹を切ってあげるなど、2、3人でもできることからやっていくことである。

自然との共生、郷土の伝承を受け継ぐ住民の地域づくり Cテーブル

宝塚市の西谷地区に特化することで、他の地域にも広げていけるとして議論した。西谷地区は、すでに地域住民の活動やNPOの活動もたくさんある。その目的は、自然環境を守り、農の活性化や他のまちの人とコミュニケーションを図っていくことである。しかし、それぞれの活動が全体として統一性を欠いており、情報が共有化できていない。このため、そうした団体や行政が「西谷特区」として一つのテーマで進めることによって、地域住民を含めた広域の方々に活動を知っていただく。そしてボランティアも集まり、ニーズとシーズが結びついていく。それには、まず準備委員会を設立し、会社をリタイヤした方や職を探す若い人たち、障害のある方まで、だれもが参加しやすい組織をつくる。多種多様な人々が強いリーダーシップのもとに集まり、各種団体や行政と連携して、持続可能な活動を私たちの子どもや孫に引き継いでいける体制づくりをしていきたい。

5. 専門委員、知事コメント（発言要旨）

芳田専門委員

発表されたことが少しでも実現できれば素晴らしいことである。今日のテーマは「活かそう資源、ともに育てよう地域」であるが、資源とは何かと考えると、やはり「人」であると感じた。伝統あるまちや新しい方が入ったまちにはいろいろ問題はあると思う。私が生まれ育ったところも自治会とは別の組織があり、そこが祭りを取り仕切るという二重構造である。自治会は今のところ高齢化していないが、昔ながらの組織は高齢化している。それをどう融合していくかである。身近なところからこつこつ始めることが重要である。配布資料では学生が2月に園田学園女子大学でイベントをするようだが、若者に頼るのではなく、若者を巻き込んで、若者には頼らず、みずからすることも大事である。

また、情報発信の話があったが、最近は、ブログやツイッターが流行っている。この会場にも利用している方がいると思うが、そうした方が率先して地域の情報を発信する。そうしたところから、少しずつ発信していくことで関心を持つ人がふえていくと考えられる。できるところからしていくことが大切である。今できることをみなさんが力を合わせて、阪神間7市1町を盛り上げていけば、兵庫県の発展につながるのではないかと。地域の活性化は広域ではなく、まずは足下からと考える。



藤本専門委員

今回は阪神北ビジョン委員以外の方が多い。これは、阪神地域ビジョンの見直しをめぐって、北と南が一緒に議論しているからだと思う。議論の様子を見ても、とてもいいアイデアを出していると感じた。

1から3までのテーマでは、特に、市民自治、コミュニティをもっと活性化させようということが多く発言されていた。住宅都市「阪神」の特徴だと思うが、通常、団地やニュータ

ウンでは、自治会と趣味のグループはうまくいくものではないが、ここには融合しやすい環境があって、すごいパワーを団地やニュータウンで発揮できていると感じた。そのためにどうしようといった現実的なアイデアが必要である。まず、あいさつからしよう、あいさつもしないで自治はできないという話や、公園や空き店舗を活用しようとか、まず、趣味で集まって楽しいことをして、それで次に進もうとしている。明日にでも取り組めることから話を進めておりとても期待できる。明日からでも変わると感じた。今回、阪神南地域の方が多いせいか、神戸にも大阪にも負けない阪神パワーといったものを感じた。誇りも持っているし、着々と実績を積んでいると感じた。

4つ目のテーマで里山の活用という意見があった。阪神南に山がないとは言わないが、南北が交流する一つの大きい柱となっている。西谷特区については、とてもおもしろそうだと感じた。山を守っている人は都市に住む人より人口が少ない。少ない人が大きな情報を発信しようとするれば、特区かどうかは別にして、新しい切り口で切り込んでいくというのはいいと感じた。せび、西谷特区で成功し、あと猪名川特区などほかの地域に波及できればいいと感じた。

今井専門委員

各テーブルどれも活発に議論されていた。その結果を実現に向けて、これから育てていただきたい。私が教える大学の総合政策学部のモットーは、「シンクグローバル、アクトローカリー」であり、これは、「地球規模で考える、足下から行動を起こせ」という意味である。まず、身近なところから行動を起こして頂きたい。ただし、行動するには、少子高齢化や人口減少がネックとしてあげられるわけだが、それをマイナスに考えるのではなく、それを逆手にとって、高齢者しかいないからできる、若者がいないからこそできる、といったアピールの仕方も可能ではないかと考えている。また、具体的な行動を起こすにあたっては、政策立案のために優秀なプランナーが必要となるが、これはみなさんがこれまで培ってきた経験や積み重ねた実績がある。そうした中からいいプランを出して、行政への提言や行政との協働につなげていってほしい。

滋野専門委員

何をするのか考えるのは重要だが、何かをするこのほうがより重要である。一人で行動を始めるには、勇気とやる気と根気が必要で、継続しなければその活動は地元にも受け入れられない。次の段階では志を同じくする少人数のグループで活動を続けていく。しかし、その次でみなさん困ってしまう。広げるところがうまく動かない。



本来ここには、しっかりしたコーディネーターがいて、情報発信や表現力の上手な方がいかに広げていくかであるが、これがまだまだである。しかし、ここにおられる方は問題意識が高いようである。「地元」と「地域」という言葉を使いわけていた。地元というのは、生まれながらに生活している、愛着を持たれているところと受け止められた。一方、地域とい

う言葉は、これまでの発表会などで聴くと、向こう3軒両隣とこたえる方が多いようである。研究者は地域という言葉にはもう少し広がりを持っているが、多くの方は近所と考えている。地域と地元を自然に使っていて、使っている人によって言葉の重みが違ったりする。私たちが本当にしたいことは何か、最終的には顔の見える地域づくりや、私たちがこれから生きていくなかで、快適な空間であるとか、持続できる社会にどのように関わっていくのかを、まず認識することが大事である。多くの人を巻き込んでいくときの力、どれだけ多くの人に関わっていけるかということに、私も協力できればとして今日の議論を伺った。引き続き、地域と大学のつながりをより深めていける活動に参画したいと考えている。

井戸知事

みなさんポイントをとらえて要領よく発表されていた。いつの間にこれほど能力が高まったのか。おそらくディスカッションの中身が濃く、テーブルメンバーの思いが発表者に乗り移ったものと思われる。また、問題点の把握と表現力があることに感心した。

まず、移住地の住宅地についてである。移住地だからふるさとでないというのではなく、ふるさとにしていかなければいけない。今住んでいるところを快適な環境にしていかなければいけない。もともと住む人たちは自分たちの地域のよさを知らない、移ってきた人は、新しくふるさとをつくっていかないといけない、という観点の違いだけである。もともとの人は地域のよさを知らない、それは、ほかの人が見つけてあげる。今あるものをどう活用していくか、お互いに協力して、作り出していくことが大事である。

また、みなさんは、地域コミュニティという自分たちが住んでいるところや、家族、それも小さな子どもがいる家庭でなく、夫婦二人暮らしのような家族と地域との関わり合いを再構築していくことに関心があることに気がついた。共通しているのは、ハード・ソフト両面でいい環境をつくら



なければならないということである。いい環境というのは、発表にあった景観のあるまちでいうと、景観は単なる自然ではない、自分たちがいいと感じるものでなければ景観にはならない。単なる自然から、それを活用して、自分たちもその自然の一員になるのか、あるいは、対するのかはともかく、つき合おうということから始まると思われる。そのときに共通するのは主体的に参加しなければいけない、できることからしていかなければいけないということである。

そのときのキーワードとして、伝統文化は効果的である。これは神戸市の灘区や東灘区のことだが、阪神・淡路大震災のあと、途絶えていた「だんじり」が復活した。やはり震災のあとで危機感があり、立ち上がろうとするときに伝統文化がかすがいになった。もう一つのキーワードは、小学校区単位で活動しようということで、おそらくみなさんの子どもや孫のことから、見守りをする、あいさつをする、指導する、といった話につながったのかと思う。あいさつは重要である。近所づきあいがよくできているところは泥棒も空き巣には入れない。地域に来て、あいさつされるとまずいと思うそうです。また、伝統文化を語る時、それを知る人がいるかいないかが重要である。子どもたちに童歌を教えたり、昔ながらの麦わら細工や伝統の遊びを教えたりという、一種の語り部を引き受けてくださると動き始めるのでみなさんにぜひお願いしたい。

商店街の話について、これは持論だが、商店街は高齢社会に不可欠な装置になりうると考えて

いる。大型店舗は、高齢社会には利便性にかけてお店だと思っている。高齢者は自動車の免許は更新しないだろうし、大量の商品を買って帰ることもできなくなる。生活範囲は自分の住む周りである。先に、冷蔵庫がわりという話もあった。書斎がわり、ダンスがわりといった使い方をしようとしたら、近くでないといけない。また、アフターケアが重要である。高齢者へのサービスに商店街の人がもっと関心を持たないといけない。スーパーマーケットはすでに関心を持っており、まちなかに小さな店を出し始めている。ボリュームが半人前のお弁当をつくるなど、高齢者をターゲットにしている。こうしたことを努力していない商店街の方がいるので、呼びかけている。ただし、商店街の店主も高齢化している。後継者がいる店主は息子とともに新しいことに頑張るが、あとを継ぐ人がいない店主は不動産屋になっている。自分たちだけ細々とやっていけばよく、いざとなったらだれかに貸せばいい、と思っているような人は早く辞めてもらった方がいい。商店組合が辞めるように働きかけるくらいの団結心を発揮しないと商店街は復活しない。消費者から圧力をかけるのも一つではないか。

自然との共生について、たまに来る人と、いつも自然の中に住む人と思いが違うのは当然だが、たまに来る人を利用しようではないか。たまに来る人にも自然の中で生活することの良さを感じてもらふ必要がある。市民農園やふれあいの場をつくることによって、たまに来る人が、一員になってもらえる、そういう仕掛けをもっとつくりたい、たまの良さを発揮できないかとして、農を楽しむ生活「楽農生活」を提唱している。先般、第11回六甲全山縦走を完走したが、そのときに若い女性がふえていると感じた。最近のファッションでいわゆる「山ガール」である。ということは、自然との共生に参加者のポイントとなる人を確保することが重要で、山ガールがたくさん来ると若い男性も来る、そうすると家族も高齢者も来るのではないか。マーケティングでいうと、まず、だれをターゲットにして、どんな手段を講じて、売り込むのかである。これがマーケティングの基本である。私たちも地域づくりにマーケティング手法を使って、誰をターゲットにするのかを考えてみる必要があると思った。西谷特区というのはおもしろいが、どんな内容の特区にするのかわからない。それが特区の特区たるゆえんかもしれない。おそらくプラットフォームみたいなものをつくって、だれでも立ち寄って意見交換でき、自由人の統一が自らできるような組織をうまくつけれないか、という話として受け止めた。

6. 質疑・応答

発言者

私の息子は3年前から失業しており、息子は正社員でなければ勤めないと言っている。兵庫県の経済情勢はこれからどうなっていくのか。

井戸知事

息子さんには、かたくなにならなくていい言ってほしい。最初から正規職員になればよかったことはないが、なれないからといって、3年も母親のすねをかじられるのは困るのではないか。本日のテーマと同じでやれることからやっていって、いろいろな道を探すのも一つではないでしょうか。

これからの兵庫県の経済はどうなるかについては私も見えないが4点言える。1つ目は、兵庫県には小さな世界企業、オンリーワン企業がたくさんある。それは技術力では負けないのだから、

オンリーワン企業をふやそう、科学技術を活用しよう、世界に通用する企業をふやそう、また、そうした企業を自分のところからつくるのではなく、外部から呼んでこよう、世界中から来てもらってもいいということである。

2つ目は、私たちの持つ地域資源を見つけよう、魅力を見つけようという話があったが、魅力を見つけて、その魅力を発信していくことで、たくさんの人と交流してもらい、交流人口をふやすことで地域を元気にしていく、ツーリズムや観光だけでなく、大学も一種の交流装置である。そうした装置を増やすことによって、地域力をあげていくことである。

3つ目は、健康、医療面である。兵庫県は医療水準が高い。今回の国勢調査は十分に分析できていないが、前回の調査では、60歳以上の方が兵庫県にたくさん来ている。反対に60歳未満の方が外へ出ていっている。それは大学が多くあり、就職で全国へ散らばるのでどうしても減る。60歳以上がふえているということは、兵庫県に住む魅力があるからである。また、高齢者は貯金も一緒に持ってきてくれる。それは一つの地域のあり方だと思う。そうした新しい分野、高齢社会をにらんだ新しい分野に力を入れていくことによって、兵庫県の地域づくりを進めていくことである。

4つ目は、第一次産業の振興である。兵庫県は大都市に近いので有利である。例えば、西宮市には小松菜だけをつくる10人程度のグループがあり、年11回くらい5反ほどの土地を利用して高収入を得ている。そうしたグループがあるのは西宮市だからである。大都市に近いという立地条件を活かして、第一次産業も頑張るといふ新しい道を求めていくことがこれからの兵庫県のあり方である。今すぐでなく、これからなので、時間はかかるが期待してほしい。